ロ 9
4071

柴田翁。中歳喪明以耳爲眼以人爲書。以耳讀人而誦六經之語通道義之旨以說性命之理。使人知其心以窒惡趨善。其有功于世也。不小少也。夫聖人之道。廣矣大矣。顏子者。亞聖也。猶有彌高彌堅。旣竭我才而未由



門 9 號 4071 卷
冊 大 號 三 函 文 せ

從之數則爾來之賢人君子豈有能詣其閫奧者乎乃亦各見其所見知其所知遂自許我得聖人之蘊自以爲是而以彼爲非互相排擊而不知此亦猶彼也謂之兄弟鬩牆村夫爭席何所據之狹而所懷之不寬乎道

之廣大也譬之猶河乎一滴水也百滴水也千滴萬滴大溝小渠同皆水也同皆河也而非河也一滴浸潤萬滴浸潤大溝小渠以漑以灌皆以育物皆以濟人以其非瘴雨毒露也其於彼此何紛紛爭辯分駁之爲焉翁

之說道也。得之於心而發之於口。堅說橫說。控送在手。或雜以諧謔滑稽。令人聞而笑笑而拊掌噱噱然。不覺入其道。終歸正而止焉。是以自國君卿大夫。至馬官廝養。婦女童豎。悅而慕之。敬而從之。皆稱云鳩翁鳩翁。何

其盛哉。翁有子曰武修。其侍講之次。從旁以邦語記之。編為三卷。名曰鳩翁道話。刻以行于世。使苟識四十七字者。讀之直領其意。今又抄其吐屑之餘。為三卷以續之。可謂勉矣。但吾邦之於漢土。言語不同。而文字亦異。

漢人之字。一字兼數義。非如吾
邦一字一意。而又有古今之分。
有雅俗之別。若六經最爲甚。若
不精密討究則其於聖經之旨。
或不能無差謬之失也。余亦有
志乎濟世者也。竊慮其如是。欲
於鄉閭設一學舘。積經貯書集



會講求。以致其義。以揚搉斯道
圖之三十年。于今落落不合。桑
榆景迫。恐將終身齎志無成。視
彼浮圖氏之造千仭寶堂。一麾
而成。其難易如何也。儒道之不
行於吾邦。如此也耶。可慨歎。吾
願藉翁之妙舌。以爲金口之木

鐸不知翁能笑而諾乎否耳是爲序

天保乙未臘月朐痛褥臥不能起口授門生某令筆録以贈事在其廿七日也

源寵天錫父

序

宝物を欲(ほり)する八人の同じ心なり人
人己にあふと紀物河ら続と残る満へ
黒しハかゝれあさらあるをかへしハなれ
といとかくまふとくらましき我に来
むかゐる文四ふに物知らあらく欲
しく人に満きらんるを思ふなむけ尓以
えむかひ来に[illegible]人をおきて八大か[illegible][illegible][illegible]の

人乃おなしき情あるへし実に世に益
なかりてしらてハ得かる事し其筋の古
へその茶の事に深く心をのへても物
きんたいとふ見てたくおもかしき王
さなりなしその中にハ天川気のなり
ちゝ満地のかきりの事しらぬ國しの海
山の色ゝ青満え人の心さ満時世の事
らえしなふらをさく　に来き月に見つる

むつかしきことなりむるゆる人もなかりせ
なきはいとく難き事なるをやさしき
難き事も技たに底気の極てなきらむ
らむ人の心のことなりといふ事なれハ
ともかく気色も見えの事ハなりかれし
あはなれといふのふる事みつ己の心を
えしらすなくなりきんとたまは思ひしか
汁ぬ人の多かるハ心の尓持やかくら國

の聖人(ヒジリ)乃道ハ天が下ハ人をおさめんを
ひろくあまる所にハ出さるを天が下に名
たかく世にあふのみく算術なる事乃道
よろく其きまハ人を動連とある法そなふる
事ハ論(アゲツラ)へん事のとも思ふ乃域ハに于
え志つの以えなくのみ乃あんをしも才を
算をもちいると藝の事をハ義えかりも物
をまもると様に見做るも河なるえ いくの本



法こゝに云ふいともいふかしく之本也
こゝろを広く思ひ合かの外に何る物
をもと也るハ雑書に似く其者く己に
何る物を其處法ハ也在紀也に子て
かく紀おきにや何るゝ也き法をも昔
乃世ともん学といふを多く事の本
る流何りく其と紀き識る共に子ハ
本かなお紀銭なに元とし又雑も気から

むかしの様に学問の道とても実にはみなもと
いと深くかしこき書籍のことを俗言(サトヒコト)にや
はらけて女の見る事にしなれは何となく
世の人に益ありていともおもむかしく
然してたまさかになんありたるお経書
もはやくちり此ころの書籍をよなく此
道の人しにもされかきたいくしくもの
しそかれを俗といふをもたいそくきく



なるに己が心をたつる事を先としん
をたつり得てもの学よく何に心を用
ふれは大方そこには知らぬもの教とい
ふ事をも称といへるにて実にさる事
になんさてかの人々お経書にならふと
き物何かと経たまへりしくなふと此物
といふぞやかそ此人の事にてなほし
とも薬(クス)しく何まらの事かとも明らかか

まてのいふる奴之濁もなくならぬへ
紀物もなきものなりといふをも過よ
ていよむくこ濁の、二の尓称ん志ろよも
称むこ流よ身の、其事え比ぞよよく入
ゑて八世の人よ名をたよ志る事れさ
も河る汁もなき紀ものく中よも思えの
和よかの泥の中の蓮跡の中乃ふ生な
生いはん濁の人も出来ぬる八多て



ゑしともゑてたく濁こととよ世よ益河
る事ゑゑえ可らしと思ふ尓会をて己
丙いえかひ本紀んよも何らく益をれ
ゑめりと貧ゑる可本紀よ有ら河らん加
こここ尓柴田翁の比ぞ尓さとり源く
去紀せよ本ら嫁へきく人も本くものせ
ら深き八何らく毫かろ奴國くよあ八
乞え哭ゆる来く尓生毎よ志く加くこ

ゆゑありて其の出る鉛兵中には兵守
の殿の法華經をも彼是借状見え給ひ
ふらるゝさへ満ふとの事ハはやくとありし
左て一度たに京へゆゑ志てしかると思
ゑむつりぬるをお孫主恩えもかけ給ひ
家君に従て何年ともなり可程大坂に在
て年とより此京につとめ程出尓さ
者尓大坂にて此翁の足給内膳正也

られしをを一二度守つけ奉れといふ
てとかく思ひつゝ主をとおもれハかく里と
いふやうにてハ其の安否此所によりて
若えても其志厚く来とんにも何ゆゑて
ゆゑ深うに月日をおくりし尓華にも在
記ころ此翁さる内意ありて家君の法
華にうちつくにもゑさせてかの足給を志
はやく出見え給ひられたるハいともゑんて

多紀まさにさも河りなる加く然八已
多本よの此く對面して何と花の摘絵
も写え加えしなとき法すと八なあて
ろ末に古らうこゝろ見留れかくて此さ不彼
凌にもの勢られ家息の法帯にて尤写
え河付られる役こゝしと在を家つ汁
る子武佐まの露ちのりまゆうちる古
紀して尤やく世に河来すかる此流の

生藉の係に満の雲く婚翁を依と名つ
汁て三老板尓名ろまさて帰きて此老
莫ぞ物勢られんとく是の尤しに一く
たりといえる未無や加て此尤やくな
里乃すとま我名ろしし来て加くを
ものしつるになん河りにけ

天保六年九月京乃二条乃堀川の
家にて三河國吉田中山美石識

續鳩翁道話巻之上

男　武修聞書

太甲にいはく。諟天の明命を顧みると。則大學の傳にしるして。書經太甲の篇を引く。明徳を明らかにするの仕様をおしへなされてものでござります。まづ諟天の明命といふは。お互に持合せた本心のことじや。この本心は天より授けてくださつたものゆへ。則天より稟得ましたものじや。仁義禮智信の徳

と思へ。親によくつくすが孝。主人によくつくすが忠。兄弟中
よう夫婦はむつまじう。朋友には真実のまじはり。
おのれ不自由を忍びて。物を奢らず。身
在なる故。明徳と申します。此本心の営
号でござります。たとへば人に仁義あれ。天に
日月のあるやうなものじや。かの天の日月さまや
お月さまがなかつたら。世界はくらやみ。人も道を
明じ来て。仁義の良心をうしなうたれば。親子
夫婦の差へもなく。主従の差別もしれまいぞ。

家内一統もくらがりじや。ナント浅ましい事では
ござらぬか。かるが故に此明命を顧よと申してござる。
常に本心の目を明けて。無理はせぬか。無理は
いたさぬか。私欲のためには甘くはせぬかと。ぎん味
するを顧ると申します。古歌に「主なしとて宿も
かるべき夕ぐれに。誰ゆゑぞいふ袖ぬらしける。
しけるとの心は。はじめより主とおもへば宿とうらく。
めきもの用心をするなれど。夕ぎりのうちへば目をさ
ましぞ。ちやまなどの事と。四方と心にゆだんしてく。

色欲をひきとめらしこと。淺海のこととさえ
まするゆゑ。何なる雅しを。わかいと覚えて。あらゆる事
を仕出すも人はなけれども。明徳のちからは思ひ。むかし
う兒見賢身がつ手になかりしく。果れやし伏もそぬ
大事なる。只心得はそのみ身じやうさ。身持手。ゆく
とせ秩前の本まへ。くだりまゐりし所。ゆく人の抱へる。
ちくさまゐりかゝ。平泉寺村と不知あり。其村に。
お亀にくらしを百姓があつて。多くの子つひの
中に。十五六なる小者。尾藤事じやが



ひん癖しく。毎夜小用と起きらし。夜食も食
を。ぬきもかゝり思ひ。主人たふこまり。いかし
療治しても験なく。せんかたなきところで。一ツ
の勘弁を仕出しゝ。其頃向は。家のうちの
馬部屋ありて。馬を跡足雷用しまず。其馬
部屋の二階は。丸竹をわたして。簀子にしてく
ござりまする。彼小者をこの簀子のうへなり
寝させましたる。其が趣一挙両徳の計
申しく。その夜は。よくく秩前あそ。蓑家に寄り

楽馬は雑役といふて牝馬じや。故になるたけ
稲をつけるで。中を附る。手綱はなるたけ
手綱を短く。肥をふますにおかす時は
その小用をさ。簀子のように行ると。夜中に
度々しるうど。其デすのこの間へ。小用は隙に
の世をかなぐし付もしも。すこしもかまふな
なるまいか。馬の小便と人の小便と。合せて
丁度よい肥となる。気の毒にもの馬じや。夜
中まで荷をいぞくとなるべ。折角の大切がら。



平常小出をいでずとも。よろこぶのじや。然るに
その竹簀はいつの時代にこしらへたものか。竹は
悉く破し隙が入てゐる。其所へ毎夜小用で
くさらしたものじや。近所は腐りかけてゐる。ある
夜かの簀子がぬけまして。十二が小者は。昼の疲れで
よくねてゐて。二階から落たれど。迷惑千万
は膝足のあるじや。何の難なく。寝てゐた其
中へ。おりひざける人が。おちたものじや。馬はおどろき
おどろいてそのくし。小者は何も知らず只がやくと

待てゐる。ここへ今くる紺屋の中より。薬を多く数
ふりすぎるの小便もよく待ふ出るが。いまだ。ふとんの
上へおちるも。目前おぼえよつて目がさめぬ。さて寝ね
そのる馬じや。猿もさそど。又ふとも甘ず。うしろ
足でくつ。馬紺屋の板をどんくと蹴く。家内の人を
おこし。よう寝くみる小者の。紺のこうを。鼻あら
しゆつく。フウくいうてかの小者を起し申す。ソコデ
小者がふと目をさまし。燧火いなし点しうか。
ちうに馬がうつ紙とて出ておるを見て 仰ふし

て大声とあげ。モシ旦那さま馬が二階へ上り申し
たとおどろきましたと申すのじや。ナント主人
真事がうて手はすこし申しいものじやない。己が
二人かう落ちたとあれ。梯子へ上げく。馬が二階へ上ら
それよりうろうろさわぎのござりますぞ。さう
ながら。かの梯子半は。短くなりますじや。おのれが
自分の心のりは。ゆめもてあれど。ただ人が見りへ。
うまかをとまりと。かつ身と思ひと。減多な大声
とりげくさめく人は。大の小用さきの仲間

らしや。ゆかん人の為欲よ
「いふくらきその身乃ころりとおもしとしてふるまふと
おのひしうふの今まで。お家ふ立ゑく。後乃
うらを吟味ちあし。おつまがかい。あつまがかしこひて。
一生をうるへ仕へんかへ。志ましい隣その。放さ。咽は
徳と咽らうするふおうしやて兎角ふらとらう
ままぬ目心と思ゐる。私心は欲。身いつさ兇
偽身かちみはいし化世りう火宅のくらしくし。
聟をいぢり。姑をいくてし。丈夫とらしくし。舅姑とそしる

ゆうふ大まちうひか出来く。後らはあひてふなん
人をなへゆうふ為甘くたる人へは妻を故の。摘
乃棲さゆうかそのぐ。されいばよくまる事まく
おけげいうるらし。なんも仕そののこへ。すらしまのふ
ぬまかする。よう教くゆらじ御せ。姿は物ハ長う
りんとんる。経いそのへ經うりんとる。あくじひよき縁と
りん喜へいいしまぜぬ。支田忠人の我とあしく
いへのは。おりんらぐへのまいまじやと仏ねく。我身を
親かのが身をたじや。こまておりい出ろさ活ががざり

僧と或山家より。寺の門へ。鐵鉢を持参て来りまして。折ふし主日は。あらくしきにもあしく。袈裟をもたくむうひよ来き和尚も中々て肩にしくかなすらのり。寺とくるまで。三里ほどありとおもへ不ぐごうし辛紅。かごの底がぬけましき。いくらしや和尚は。袈裟も衣も。やぶれ御ぶまるなしまして。道の人足も気のどくがりて。をとらかけまするく。纜もさま多くいろひこそうで。ゆうくし袈裟をつるげ。投和尚さまもひて出家

なりんしとへ。和尚を気味よかりてあらいつうし袈裟を衣は。よぶまするを菅笠にあるくもの。御坊殿ふせうくよ袈裟よのすしき。ごかごの底こか底もぬけはすまい。鐵く気づかひはござりませぬといふ出家。乗移ると果よるとの網を丈底かメキく。ムへ和尚さまを衣を投くまかそれ中く安心がなるわ。此番営なし。合羽の上よりいま一倍。丈夫な纜かけみしして下さりましいそがく人足しもふおりひまして纜きけと

拾ひあつめ。合羽の上を竪横十文字にからげ。是
ではたまられまいさかもと。道をいそぐ。ある村を
通りかゝる。折ふし此村に。法事のあつたとみえ。金
経の光明。両傍の帰りにあふに此僧(?)。寺院(?)へん身
て。かさをぬきとみえる。親仁がかゝうのうちより(?)は
いふすれ。ナンー(?)この后。これ日の内勤化いあり。ござい
までいござんめかいかうえみ。寺堂迅速の世乃中。
生老病死。會者定離のことわり。ゆるさぬ(?)無常
の。おもひいだしやら。なきゝく人のみのくへアン

ちの御事とえさろしやまでございま(?)事へ寺ば
に清き人が。なんぞとなえて。死骸を往(?)所へ
つまていのうちえてある。ねもちるい(?)とのどんで
ありぬ死という事とかごふあ(?)うに和尚がき
ほけ。さても我と死人とも(?)のに死。いまくしいて。
まごとかぶの弟ぐ。実さうしいすうとがの死人い
けせまれひまかとうさ。無ふかうへ死の事
小事ふめぐ。死人しやとらふぞうぞうでござ
仲人じやさうをがうさに御へまのまへぞといふ。

和尚いはく様をとつて。今のたまふて。かれの
中すゞがらんごくへよるべ罪あげまく。罪人でも。
おりなりといふ。真実に文ひろうして まくれ
罪人ぞんきうて。ごうでも気違ひじややうなる
といふはこゝだ世の面白いとこじや。知らぬ瞽
瞽を神の縄がくしに結をの忠。誰よこの世
でも死人じや。行の中へも罪人と
いふものはよろ文盲ちがひじやあるまいかのも。
邪道うた法をいふのでないか。皆はけ



をすてゝその律儀がかるによつてじやさかいまで
ヨウ内合点をきらしませよ。そのところいふに。
人がいはぬ、何事もこのやうなものが縁じや。
だが人の道致に
「世の中は何もいはずにいやすれど。ちよとしあらへ
人はつんとしまく おのれは。そんじやうに覚悟せんならん。
なりふらい辛抱も。なかなかのものじや。こゝらが思案。
中庸に。言前によきこまるやうにな。路のさゝ
まんまに定まる時。国まずして くらし

かじめの苦労はなりけるじや。孝をつくす人の身
火とのたくおくしけるを。かの半ばとして会へ
といひけり。小児も辛抱するこそ年寄としめの
苦労ぞござりまする。わが女としの四十の年
十七才。天性もとなりしきまゝなりしが。としの
能とかなく貴なる職掌もとくのひ。当時も
をとこそ先の家にかへりし様子爺もやの。まま
ぬからぬ常におなましし。婚草つまの中をと
まん年は。小さき紙をあまくしとせるこのおなる

うさぎはあひ。右上でんせいし娘が手紙まで夫の
家に。久しく折りし書おくさる気なりけり。その
文を。恩をまことぞ。せうしやしとか、つらずつき
なる父母をもよりしまとふなりくの。御
宮いくの御恩は。舟車をも借りずして。まだ上
いろくと。御きんおいとりけは御父母。宮方の
などおもひ母しをまわりてよさるみちこうまれ
くらの御父母にかへらば。たゞけんには孝をきる者
まり。御あつかれは。けなげそくは。兄弟ぞ親の

御兄(おあに)に。気(き)はけてなぐさめに。おもはいさ(?)いく
ぞんじまゐらせ候。殊(こと)さらいくまでも御側(そば)に
居(お)らるゝは。浮(うき)なるさ年(とし)ふるども。女子(をなご)の縁(えん)まで
しんは。翁(おきな)つとまりたくぞんじしり(?)くりきう
わるくしは。ちまたにふなく。かすらへ嫁(よめ)りは。恩(おん)ら
来しも思。おしも思へとむきらぞんじやうべ。
いさんで来しりしまく。親(おや)の来へ。なにとも
御あんじ下されまう(?)。御大年(とし)に御いとひ下
されまうらいのりよりし。かしこまりそくへ。お

しん御縁(ごえん)ありやうしく思(おぼ)しめしとられそんやと
めでたくぞんじまゐらせ候。かち(?)みなさまを
やしさぞく御ものひ兼(ぐき)と。御きづかしく存(ぞん)じ
どと。御りぞ御あんじ下さまれふ。いたしたく
とお(思)ひ候へはあまりと。御来(きた)とも御申しられに
まいらせ候。様(さま)の申しなく。御礼申上まゐらせ候。めでたく
申のこしのしめまいらせ候。菊月(きくづき)ころ。御父母(おんちちはゝ)
さまへもよろしく。御兄嫁(おんあによめ)御あにさま方(がた)
へもよろしく。かしこまゐらせ候。御せうとさま

おぬかくし。くまぐにねがひをよりしめく
くくりくとあり。古く来ハ志ら孫とも。まづ
け文の世らそいよく女の名と。志い定めさる辨
なく。いろるけし見侭なく。舅姑ことしらいへ。
生涯夫の家にまのらく。どのやうな辛抱を。
このさうふなんてまする。わろうするど。親の慈悲が
かまつく。まアこちらへとしく嫁へとさうすかさみすもの。
先方の娘をとなんく辛ぼうらう仕よくいうくねん
とくとてをし戻つくもしやし。かまい里まうへごと

きくめくまゐ入るる婿ゐハ。ナント見つかまいとの
じやまい死。見ゑみ的従がくしわふまかくじや。
からくへる嫁入し。こちらへハ嫁入し。つまぶせら
れ。まきふせられと。舅姑をゑらきうしひし。又
亭主をよう私き仕あさき。離縁状ととを
ハ。書出しと貴人損まるがえ。杖にそくまらう
嫁入口をふづ孫く。一生を終るれどもうしハ
すしやごさりまなめ死。おのまさく壊ゐすれだ
どのやうな家のうと乱かをとる。たる人の鏡さ

一大ふゆし風になびかるゝやうに竹が。よく久しく
たへしのげや　この堪忍のすがたじや
親しさおへまする。姑じしう舅てゑまするれハ
まかふに気すまふ。又無益の竹乃又名七分
たち延く。志うと事くれ枝葉をひろう。こまよ
事をこら。あるひハ毎ふうさま。まさハ風り
ふくまて。鍋をあいふいる。天理に随ふ
妙用。竹木情すしとやら。命ともハ用心て
ゆうしく。ある先年洛中大地震のとき

多くハ竹藪へにげ出んで。これハ竹の根がくゞ
がはびいまよりく。大地もわれぬ。これハせまりじ
まの用意むかし半ドや。其の根がくこの張のハ
竹のこゝとまね。理でござります。竟じやまよる
て。人もちやノ本ふかとのまねバうつぬ。和ト共
なんぞ。本人のうすじや。ちよつとかとつらもし。時く
刻ふ。なんと気をつくねバせぬ申と。うつりる
のじや。万物一ぱい。おまうおさまま本ハ多い。農
業をする人の心よしるよ。風を仕るふ。風ふく

年は。小蔓が多くなる其の年。又唐黍を
つくるに。風あるとしは。自然と土際より上にて
多くの根がいるゆゑ。是皆風にあふて倒れ
ぬ用心。難波といへど。大坂とよんで辛抱
する子がすくない。いふても大半は。志のない人とし
分限の実として。僅の辛抱が出来ずて。此の
たとへをも厭となふいふ。さりとては面目
自分もないことじや。此辛抱でおもひ出したおか
しい話がある。さる所に十六七の娘をもちまし

たが。脊たけものびれは親からも心がせく
又時分の娘なれば。諸方から貰ひにくる。或時
母親が。むすめをよんで。いふてきかすは。方々より貰ひ
くれども。是ぞと思ふ縁もなかつたに。此おろ
二軒からいふて来た。このふたつは相談しても。
よからうとおもふ。一軒は金もちなれど。チト聟
どのがえげつないげな。又一軒は。聟どのは品もよく。
よい人がらなれども。身代はうすいといふことじや。
去ながら二軒とも。聟どのゝ氣象は。実体

なといふす。作りハ見ばへさい。このうへハどうぞく
ありとも。そこでこの気ふ心ざ当へ。よめ入さそう。
コレ縁半を仕ましよ。ハア頼もしいの気。それならば
よい半がある。今まちの当へ申さくば。太の肩を
ぬぐや。よい聟どの方へ。切くばたりの肩を
ぬぐじやんせや。其まハりひぐ。おつまへこうち向て かうと。
母ごのうしろ向ミ。行けば嫁ハうなづく肩を従まく
ちらと。母おやがモウよい気ドレくと嗅ぎ見てく
これば。嫁も両肩をスツポリとぬいで見せて。

ナント面白い俗ハござりませぬ気。右の嫁ハ。左右
の肩を。一度ふぬいでも心ハ。全くこちらの方へ
申さ。夜ハよい聟の方へ。申く積りとみえる。
さても。四ぐんのなしぬ嫁御く。ござります。左の
申すか苦手をころめく。嫁へしらう。中く辛
抱を出来るものでハない。去りしハ申すむすめ
御ハ。日本でハおかりハせぬ。去りながら天竺の五
ドや。さるふ僧く五百羅漢も皆肩をぬいで
ござるとか。物ありがいふまでもござるもヨウおきて

あきれませ。古歌に「春の夜乃やみハあやなし梅のはないろこそみえね香やハかくるゝ これハいふものじや。隠してもかくされぬ。心のくもりが晴れしためしてまいる。かるが思はく此天の明命を顧るところ。気を付けて掃除をせぬ故がなりませぬ。さて此の掃除をよく仕おふせる人がある。常におわすれやませう。上気意に。其猪悪労を渡在りてゐる。老人夫婦がござりましさ。志がある家を継ぐ男女の子もなく。その身ハ江都に

年ハよる。親類縁者より。かまもれ養子をとりくすゝめても。どうしてもきゝとゞけそど。貰ふ三十日。かうひハ五十日。まとハ七十日。長いのが百日ぐらゐ。かよそ養子二十人ばかり。一人として辛抱とをる然ハなし。ナント難儀なものじやないか。これとあると我儘偏屈おやぢや。鉄槌婆さまが。絶て実子なけれハ。つるそのじや。に十七十になるそのくが遠別の所りに。洗や あちらのそのが。せぬといふて。小言ばかりいふて日をそ

奥ゆかしがる。一生孝子はそしられぬ。かるく若いことを破
く。おりひするがよいと。人の子は母かならぬものの
じや。一生命の書を仕つめて。末期の為までも
順じまするものもないやうな。孤の上に納得ゆゑ。
孫ふうりでんあうて。蒲団かぶりの。乞食する
あそのじやと。町内でのうはさ。されども裏ふ虫
もすさぐとやるぞ。いる前の息子どのが。此噂を
実く。どうぞ其家へ孝子で出さるまいと。われりひ
付きさ。たとへ人の如しよ小ぬかこ合をかゝう

孝子にやくなし。世間ではいへど。人の家を法ぐると
は。掛引の大切じや。その中には経営をとつてゞ。殿
たりとも云すは。聖人のをしへにて。糾純生くの
道理じや。この息子どのとも。不自明がたちて死。
但しい辛抱の仕まゝい家を実く。かゝるをやれ。
一辛抱して。名を徳町小志しまゝとかりたき死。
ぬいとせよ。有がたい志じやさそ。孫とりまして。
やいまゝとうらが。不老不半しくのひ。引續
つく。又七日ならぬことをいふかど。今まで辛

抱の仕人がさい急じや。中くむつしい。お親の
気質ぞう欲かうれと。おりひ見づらふうり。
二三ヶ月をくらしまさが。どうも堪忍がならない。
不拾俤おやが。編屈とやめられ。姿さへがちや
愚りかむかせると。モウ一日も辛抱がならぬ。今へは
仲人の所へ帰られ。つとい親どもへ沙汰く。お様
ちうれと。堀井黛には上せきせるつひくは。あお
んの最中。打急て親が。つらしい障子お
りゝめく。太工どのと新く。とて合せとしく



貰わく。ナニガ太工どのが。あそくとうて合せと
おつろくとみゆれバ。障子の上とゑづつてれ。鴨居こ
えめくえ。下と削らい。敷居へうおとえ。ほひふ
障子の上下とゑづつくく。その上障子こ引
とろりく。柱の四ぐゝふつかせ。コツトリと敷居
鴨居こちゐ。隠くみゆれバ自由なる。かの息子
どのへ。あの仕業とみるとも見ねとしと思えず。
くどうりと。ながめておもてか。おりつびれ
なる煙草と付おとし。横手と丁どうつく。太る

勤るまことが。あなたうく分別がかゝらく。辛抱の仕
ようなり。とつぐ先の家とお続仕おふせて惣
お二親と介抱し。末期とみとゞけ。家名お
続をまつとうしとやつてござりまする。あなたが
わりがたい目のつけ所じや。そこ思ひは敷居鴨居
も。はじめより家にはいつてある造作ゆゑ。障子は其
うつわくふとくつくつてある道具ぞ。具合ようてはまう
ぬは。始よりあまそてかるいたる。障子がてまへ
なくなつて。家つきの鴨居と敷居とならびて割

つく。障子をはまりふとめる。細工どのはふいとまけ
らぬところを。うつくしう入こむ障子の上下とけ
づりて。敷居鴨居に。おちつかせてある。人の家を
お続するのも。此覚をはし様じや。二親は
家づきの敷居鴨居。聟子は外からはいりこむ
障子じや。そこで親の偏屈をゆるめる。母親の
あやまりがゆるまぬと。相続が出来ぬといふは。敷
居鴨居とならびて。障子をそのまゝ。そて合
さうとする。それ分別じや。ソレナ。細工どのは。天が

志てく。一人もない。それよよ。とききまん。行方懐に
の中御子息子が。おまへのゑふ郎と。ゑうりく
て家づきのお親れ。お店野店に合せれば。工合
ようござるものではないと。はじめくは息子
どのが。氣が済いでゐてる。サアまいくが入用の
ところじや。全く喜字どものすてはない。
婿ひでも。聟さんでも。皆云人氣をとし。此咄し
の義理を。よくのこたて。親子むつひ。主人子むつひ。
丈夫向ぐ。かのぐと商売の。道理をゆく。今
までのつみ恐しい。いましくしいが。立よきかりよ
とみちく。大安楽とゆかて。縁ひはござん、
ませぬ。結ことが明徳の明らかなりましと
縁ぐくござん。まして

林直

續鳩翁道話壹之下

男　武修聞書

山川の末にながるゝとちからも身をすてゝこそうかむ瀬もあれ　すべて山家にては。米麦乏しく。おほくはものを食するなかに。栃の実を餅團子にして。食する事多し。その製法は。栃の殻をとりて。実ばかり袋に入て。谷川にひたしおくこと。昔よりして。餅團子にするなり。今京のこゝろは。水ちの実。谷川におゐて

まだ志げし。実とよりて。穀だうすまべ。浮んで
流まよと。人もおもひがけなく身分貴賤を
捨まづらうみ。だうかといふまみてよみしうさと
きちうえまゐる。表面白いすどやこうまに法につく
御ふれ披露やまゐる。去ぬる天保癸巳の年
五穀のたうひきく意ゆえれ。飢渇さあまよふ人も
多くありし。字え仰しさる御触く様に便
のうすふ出し。めさま救荒一助と銘しく。松の皮ご薬。
土を含するの法を。出さふれしおそばさし。極のり

ありく。ひろく滿人にかどこさせくすまれ仁
恵のありがたさるすやまもおもきあり。志うれしとて。
百年のうち。り様その製法をぞうしおひますす
ること。けうう紀とぞんじましく。恐きとぞを
かへまこるぞ。今その一法と。御披露やまゐすう。
松の皮。要事なぞれ。ふり出うろ札もござりませ
う。土を食すうしすれ。いうなる飢饉まと。尽き此
ちとく。實ふ末嘗さきの法で。ござりますも。
どうさもヨウ おむえんあられませ。救荒一助の

文小

一 土粥ハ製法 武友医の家法なり

土ハいづ方の土にても砂石のなきよく。土め
ようさを撰び。土壱升ニ水弐升入て。桶の
中にてよくかきまぜ。上水をとる事数へん。
また水弐升入て。よく〳〵かきまぜ。別の桶
に入置。底にのこる砂石をとり。又水弐合。
おの〳〵入れまぜ。水よくしづまりおく事二日の
あひだ。一日ニ二へんづゝかきまぜ。すますし。上

水をかへるなり。葛の粉こしらひの粉を。水干
するの法のごとし。右のごとく製法せし土へ。水
精米入て。煮ることよく〳〵さ粥のごとくしるく合へ。
その上へ。菜大根など切こみ。なをしばらく
煮る合にてよし。一日に二合より五合までも
くらふべし。味ハ塩にてよろしく。五穀を
合せずといへども飢ず。身体すこやかなり
とぞ

右の通。製法の仕方を。此度あそばさるま

しさ。ぼうさハ思し召のまゝ。お相続となりまする。
志し遂が。滅多ふ商ひそこなひし株などを。
耕作や機織その中によおりとやせず。申さんがある
ぬ。志し業をはんぐ。機嫌を慎まうより。
人の為を勤めて。機嫌をまねりますが。我要
ぐござりませう。平売業趣業事ごわま
つく天地神明の。おまくしことを。守るより。風邪
もちあら入りますもが。とうく身上員身がつき
をよもく。家業大切ふ勤ますると。いはま

分限相応のさうえまはうるねと。はふるうれてこそ
まませぬ。たとへバ竹木の花さへ実るハ。人の
業とほじ楽じや。ほじやうふ。むさきこのる
竹木すと。大小のござりますれ。人ま貧富貴賤
達の。むちがありと。ほじ楽でござりまする。さより
みかし。庭まおふる。ちくさいあまそと。花のさうねと
いふ事ハござりませぬ。花のさうねハ。此方の勇
貝員身指ミう。やまぬのじや。身をもとゝこそ
うかむせとわまきとよんで。鉄ハ。面白い事でれ

ござり升せぬ所。是にはなしがござり升しが
わけ。よりもおき〻およびてござりませ。相模國
津久井郡。川尻村といふ所に
ましてわ郎の百姓でござりましたが。茂兵衛と申
妻しる家つゞきの娘を女房と二人して此所に住つゝひ
の人。まづ女房は人の男子をもふけまして名を
揃ふしやゝます。此子三ツのとし。次の女子出生
いたし。揃ふて乳母をとりて若者を致させまし。
こまし勤め今より十八年まへ。寅年のことでござり

升。さてかの出生の女子は其後近村へ縁付
ましたが。また〻引つゞいて女子出生。出生も絶へ
ありましたが。先立て病死いたしまし。さ
まだ打續き。出生も多く。稼まするの〇
ささも絶えず。次第に備へも出来。年どし
の悦び。病死と同病ようやう候して〇〇門の
悦び〇〇〇は〇〇〇田畑までうりもちひ
ましてと稼備へもすますと。女房は同病を
若ふ〇〇〇〇〇〇。申年の六月病死いたしまして。

夫さんぐはなりまさ。村へもやはり訳まくをも
実母も。はやくに他国へかけおちいたしまして残り
しものハ。乳母と椋家とぞんりまでおさりましと。
此乳母をかゝへおきまして。ひとりのひたしてし
人にくござりまするが。此江戸屋へ奉公に出しまし
て。二年ばかりハ給金を貰ましたれど。その
うちハ不如意まゝき。給金も出ませねど。乳母の
親ござりよりハ。いよいよとりかへしもやませねども。
まゝに掛れど。その訳。此家の主人に因縁にて



めり。と云ふ主でいひ。実母といひ。心得も宜し
くる孫だ。いづれ主でおります。家名文縁と入れ替り椋家
仲さ思。一しほ椋家と。不便にぞんじ
まして。親里へ帰りがてら。預り分の家督を。
そぐく売まして。今子のあつかって。親里へ告
ひ。自分ハ生涯身をつつしみ。後をよろしく
そ。江戸屋の家を。ふたゝび引起さんとの志と
そざいましし。親里より一札とりし則ことわり
川を村の。人別に入ましさ。かどうのか大切

なれど。所詮人のちからのおよばぬ所。かゝる折々こそ。神ほとけの力をかりんと。うみ山みやく。百里の路をたゞ壱人。讃州象頭山。金ぴら大権現へ。はだしまゐりと。いそぎました。さうして神前おふく。主の家をとりたてるこゝろざしとねぎ。三ツの願ぞといのりました。そのわけハ。在中よく若い女子のひとり住居をもちうるなまじひ。心よわくてかなはず。又人りこさかりもいたさぬ。先当分一ト鋏をとらします。

廿二ニ髻をきつとつたれど。廿三ニ元結又出たまゝ、髻とあばら揃ふるまでせましい。かくとんを掃ひて。此の小国元へ年ニ帰りました。ナンドおの筋い忠義でハごさりませぬ。此人出生ハ。同国安芸紀伊の御領。出在村の百姓。忠七といふ人の娘じや。年ハ二十。あいつらもけんげなれど。又ゆうかに年をとつてもなし。忠義の為ニ弟をこのまゝかず。主の家を引起さうとの志。ヨウ存じてわらうじ沙世。まゝのうりさらず来ても。古人の

御ざる。志ある者ハ。ねとつて居る猫の子でも。志さへ立
ますると。成就せぬといふ事ハござりませぬ。昔ハ川の
中まで行く。雁までも大空の中から魚を
釣てござる人がある。是が一生懸命や親のいひ付で
出来さるといふでもなし。腰ぶりきつて川で。人の入
とも。病気の起るとも。飛も鮎をわすれ果く
日がな一日竿をもつて。立通しにうち。釣糸魚の釣
られぬとも。一匹せめての雑魚十づり。されバ夜々
や名人ともいはれるでござりませぬか。魚を釣さ



いふ志ぞかして。此名人が出来ることじや。是が
此日。儀りに出かけて志でなく。平生志ごと
すりまして。まひすることと。たゞ魚つる事ばかり
おもふておるゆゑ。此様ともなく事とも忘るのが。志
じや。古人も。念々ちからと。忘れざるを
志といふとおほせられて。いづれもあくま
に。人ハ志の立ぬと。いふ事ハないが。
勝しい志を起すかいが。おのれ毋しのく
母さふ。忠孝さ志をとくそ志すると。わがなさ

ちつと〳〵ハ筆ハあハ。筆先あまり出来ねど。まと
ハ出来ねどつかハ。志がらしめのじや。孟子の
いはく。志ハ気の帥なりと。られハそのじや。
こゝろざしが砕けると。気ハつまらぬもの
て志ま人ハ気によつく勧ぐ。その気が
くさると。箸一本持とるのらく。返事
ものとりやふなり。りりそめも頬ふくらし。
ますがす遠ざかり。居眠しだり欠伸すこし
横になるのハ。志がくずけるのじや。御用

仏なさりませ。志がさへバ。気ハしやうらう。女の首
でも百里のみちを。跣まゐりが出来ゆへる。ま
ているんや。恋の道ぐ。親兄ま筆人も人をはく
家業出精が。出来ねど。いふへ六人の積奮
のまゝへを面目まし。志しらまい男のなかなりう
じやござりませぬ。夫は婦家内の
とり志まりの出来ぬ女中ハ。繞に親ハおそさ
まね苦しや。チヽお供へまゐれませぬこまではん
おう〳〵へ縁がゆる。むし縁を志ゝめ。国の人を恥

へより。スナ鏡屋の旦那さんをこんまれ。わが身う
ひろ物が有く。うつきさふ若の事て。織さ
大おうをおゝぜ。ヤレ親父さん。おなつうしと。かの
鏡をとらうとする。直さきしを流し。ありまへ
どうさつしやるのじや。イヤどうもありませぬ。是ハ
此方の親父さんじや。めつさうな。それこちらの
うちとのじや。十二うちとのれ。黄物うしハ實ませ
うと。代物とくしひ。かの鏡を若屋へおくつて。
さて女いつくりんそを返事思ふてられハ妾



妾と冥途の偏がありまへ。か有がらうくらんねさう
な。行うとせよ。死つてくらん二年目に此月より
かくさうへ。あかうさいのじやと。めが親しとを
あらしを恨んで玉りくおく出う。ひとそのり
二階の出ずかうして合。出ていうて二階へ
あがる。かるところ女房が用事あつく。二階の
出持のうさを。聞くりんまへ。ひるうるのがある。
より出しそりんまへ。此又六与女がある。是も
又びつくりし。二階から飛んでおり。亭主の

狗ぐるをつけまいと。きくゆうあくやう。悋気嗔
嬋がとじはつて。ヨテ凄の妙琳が守はけらく。あへ
きらけると。いよく、りんきの花が咲く。妙琳も
洗りさあく。ソンナラもしか二階へ往く。男女
かうんゐくきまもらうと。二階へうけよらく。鏡
と一目見て。こいつも又ひつくりして。二人がかく
太あくとおげく。あまりなまへでふう。悋気嗔
嗔をさらしやるふ。御気毒や。二人いの
女中がみよめしきますとくく。あの

活の狂言をまとしてみせる。ナント面白い趣向じや
なんか。トツクリとかんがへてごらうじませ。嫁姉
の鼎ごさおひ。親孔の中あらひ。兄弟いさ
かひ。女夫げんくわ。村きと聊用の付合。親子
主従のなかもうちあつてこそ。けつこうの仲なる
うちも多へい。なら人の気欲ふ。くしおしのうき
かゞみの新世帯もくしみえまる。我すごろの
わたくしわがのみをかへりくるが。営の秘法で
ござりまする。身ふきうつくへときべし。忠孝を

はとめさんへ。そこの乳母は十年に村さへの
つとめ。そのしらぬ月日をおくりますうち果して
乳母が推量のごとく主も老母もちりぐ〻な
ましくなれバ。いよ〻志を立ましく。家やぶれと
ならぬをまもる。むら村人。名水をうけおれまし
たり。江戸屋の手あまたつ。その家名を紀を
[illegible]一家のくへ。村分へ對し。出身め半ごく
ごくりまするまへバ。かねて村分の老母へうけ
あとを重ねしくる組子。幸手ふくでふはうりまし

手つ白。利金女房と組揚れ。実がのこる村分さ
従代ともくさし。家名お続の為と利
偏さ。村役人中を始その志をうろちひ。とと
どもに生活をいそしはつくましく。加輪ち屋
おいうり私もしきれバ。今をかく恥ちこゝり
ませりとも。主人はいまさ。他出へかけてかくさね
いなん。屋敷の湯に。私どもの小屋をとらして
かさまし。それで。ここに引とりの人の田地四反
を。はづりはし。ゆんと譲あり。田をすき[illegible]

どうぞ色を争ひ虫をころし人の手をかゝず
しその。銀盌辛苦。此程もござりませぬ。夜は
寝ますべき鳴のこゑのも気しゆび。朝はくしうらう
起くらぬのめ出しむ催ませて朝餉なる鉢をは
くりき傍まれ。織つむぎ縫針のわざをもして只
此児の手足のびるを。あのしるし。年月とかゝり
まみゆるうちつみくを擂鉢十歳にめ御して志も
おとうしまいらせ。翼に乳母の働ら。手仕事を
しまけまりを。よもしさぬしや。縫もしへるのとと。

乳母といふすうて。たゞ。かゝさまとよびますれ。
ひとゝは乳母の忠実。揚巻に徹すゆゑゞ。あつて。
おのづから彩られるまする。扨らどのおや里まれ。
赤子かくし。飽ましさ。実を。文五郎とやらを小児
ことも十歳あまりのまめまして見え。此児を
川崎のひとへ丸よせ。揚巻しるもふ一年あまり。
手ならひをさせ御しまく。その方の人をさの
んぐ。まろ坂へ出ても。それより江戸へ。幸ふ
つり申しさ。あまり今く。実の子をとりぞ

育てまするとおのづからそれ子を。疎略になる
心がおそろしいと。百里の外へ実の子を追
やり。それ子を育てますれバ。あつぱれ志。中々
よい手本でござりまする。十八年の。うちに。わか
娘の介抱も。わが児ハ粗稗の女ハ食ハせ。とあり。
孫をゆせくべ。継孫ハ。常体の食をよく
させ。此子を母とよぶごとく。わが方ハ主従の心
ねを。失ひませぬハ。丈夫も及びなく。志しくござり
ます。此孫ができまして。継孫十八才のとき。

元の屋敷地を買もどし。四方だりて七間乃
家を。つくらふ建てうへるをとひ。柾小若き人
とめしつかひ。田地を町に及をとくり吏のこと
らず。さきさふ家出いたしましたが。老母とも共に
振まわしまして。此さうしと丁稚ども。手代どもと。
女子ども。召ずとヨウ申しておりませ。
むかし。本首殿との太切がのぞく。小国旅
く。平家と戦ひましたとき。味方の兵へや
付く。然敵がへよ。斉藤別当実盛と。名乗

ものがたり。かのこじを引き。筆をとりて
吹口と申すなれ。梅咲せしまて。これは義仲。
は殊に孫繁のうちになりし時。敵わつて実躰
に七ケ日中まんまましてあるす。ござります。
此恩をおもひつて。撝おろし筆をとりしく。
実とりへ敬對せし志。ナント中々まちさ恩を重
いものでハござりませぬか。七ケ日さそかさこ一日
くらさめても。命がたいましてや。十年十年。
なかひは生季一年。主人の恵をうけく。その

恩を。おもひとらしくと身衛手をそろへ。幼
稚なれなりしやござりませぬ。在所におさ時の
事をヨウせひ出しましたが。昔物ハ黒
りめんの紋付。裾に八雲に鶴のもやう。ちりめん
ごろふく。絹色しつものを。此もまだ。紅炭じやし
ゑい。株の中に鼻汁まそて。ゆりて雑炊だ。稼
をふらし。高屋ござる。首のくらいたのしふを
馬屋ござる。味わいつまぬの。鐺やさてはうけりや
めしも喰めの。広やかんめハ。仕合せの中にてござんとも

みゝのし。ヨウロがちゞまるのじや。これまで多くの
妄念のかたまりじや。ソコデさつぱり主人の恩を忘れ
果て。きたないものじや。おまへが此家にわくせうだ。
足のすりこ木になる程。使ひはたらいて居るのは
はたらくは。おまへが禍をしらぬ世すぎ。忍術があの楽
は出来はせまい。わしがおやしなひをせねば家
内中がみなひもじうてかなしさおそであらう
と。我もくと。鼻をのばして家内中がおれが
の命じや。これまでいひ出さずにあるが有るさうな心の

手代殿が。禍にめぐりあふて。忍術くらそつさ。鍋
とうらう鬢を太髷に結うて。東山へ花見に出
かけて。みんなくらの隠居におもひがけなう
おあひましたら。ソコデかの手代どのがびつくりし。
挨拶もぐもぐと此所へお入りなされと問ひ申ませ
ぬといふ程まで。おとなしうて立て待つて。隠
居と。つまりのものに奥の天窓もせぬをふり
まくらちく隙をまて。挨拶に入る。かの手代
を呼付け。其方は今。禍に出くはして笑さうが。

さいぜんおのござるは縁じや。其後どこの国か。三百六十日
鼻つき合してねるあまりに。久しうも目にかゝらぬ
ませぬとは。まんとして挨拶じやと。さても待ちかね
た。手代どのが。バイあの世までとこしなくぐ。此やうな
かり体しられ。実は根がよめすれ。百年目でござる
つらはすうとといはれた。よろこべるこの百年目が。
一年のうちに。一二度で。見つくるは此月日んで
なさしませ。かのおもふどのゝ世の中に。主人の家は
知らずとも。おさる見へりと空ずるも。せめて

年の年季を待ちかねつとめ。親請人を。ひさ
出さぬやうは。勤めるものゝござりまする。或
人の言へり「人の子をまうくべからず
惣領の子といふ。乱子もあり。忠孝は
天下の大本。ドフゾわざはひなりとも。太春の
ないのは。わるいやうにいはれ。御して こまれ。
高祖とまで。太宗とまうし。功状なしには
遂に御位さへの御世を進じまれ両年。
御褒美として御味多くありたまふり。吏のこと

なしとぞ。都ふ帰まして。御学問もびくわしく。
承りますれバ。心の身とすてこそ浮む瀬もあれと
いふ。歌のこゝろを。今さら思ひ合せして。さうさい
るすぐハござりませぬ故。於傳ハ川崎村役人衆の
うちの一小揚弥ふ逍ひる身となりめぐりあハひこゝろ
こまかなりふ。志よろしきまじさそれ博労との。
よい馬と世話し呉ましまして。礼とかさずハなりますまい
と。銀弐匁博労のうちへおくれし。厚く禮といい
たまわりし。博労もおなじふあらかさ。孔世なるの



人ハよい馬を。出所せず買とまた買添としん
はまで高らざひうて。銀で出すり売らんと志くす
都して。ひそかに徳付ふり。ともがらと上くくるの売
うひよ行く。いとより様まなる人ハないハ。数十年
博労を渡世ふ志さが。かゝる事ハ始てじゃ
じゃと。人々へもうしとかされましたに。又博労弥
耕作の暇ふハるを。ひるく出雲浦にいて。
二里ばかりの所へ米を受けて通ひまするに事すが
ある。出その日ハなるのうちで。一日分とかるせまして

絹の縒。太さなるかぎり綛を。こつちらしく。しまを格子縞のきせていて。男の衿をうら紺のときさ。かわいくど一ツもきせません。萬掛よりて。父をおろしるときさ。一ツもくさせ。御らん途中まで。乃ころ一ツを縫はせまして。是のことはかなはず。おそろしや小屋住居の難儀の暮しをなされ物をあらましも。んのあつく。かゝるときあれば。しくりそのを縫千年いかゝらず。世のくさの志じやとおもふ食料の衣類を毎朝ましつで。小鳥



鵜さんとやらすじや。古歌に

一 山鳥のほろほろとなく声きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ。これは行基菩薩のお歌とやら伝へますと。いふ事一さい衆生を救はんとして父。大慈悲心より。およみなされし歌なれば。中々もおろかなる事でござりませねど中まと。父かとぞおもひ。母かとぞ思へとは。指別にありがたい。思へる所がござります。今までのお乳母どの。慈悲心。食歎。おもひまするの年

未だ意味もぞんじませねども。みなし子となり
ましく主人の家を引おこし。主父母を敬す。
忠孝の志のありがたさ。御基業蔭のひとり
ますめでたふぞんじますれ。いつまでもとぞんじ
ました。孝経にも。身をたて。道を行ひ。名を後
世に揚るとござる。お前にはお乳母どのを
みおひとのてござりまする。扨息子文次は
こと文字おとなしく。生立いくし。当年江戸表
より。御覚よく。修業に為すく。松坂をおち付



帰らく。其まより母ともろとく。川ざき村へ参りまし
しと。暫く逗留して。又松坂へ帰るはいぞく。
あるへ参詣に。けふ年なれば。揃孫をも見せ
不孫悌さそりと。主用をとして。おくびの中を
ますれば。文次郎は。御主人をこのんぐく生立さ
出しとよる。よきは付。わるきは付。わかあ
ぞうね半じやうろく。いづれ及ぶまい。ところ
格別大切の身なれば。奉公ぞかりそめにし
うかくせぬど。傾り女なぞとは。かならずいのそく

なる事は。かゝりまゐらせぬぞ。りしや。病ひでもうけ。身に
疵の付く事がありてハ。爺御の家をけがしや
うかと。恥を害くにをのぞいき。返すぐも。
身を清浄にして。三従をまもりやまこの乳母ハ。
何いくへ四十ね迄ど。こゝろざす身持のわるいと
を。孝行をまもりおとはわしハ内く出る給ます
ぞ。ゆめく志まもと。浅しんぐ三宝をまもりやま
と。無ふ言。無念をまもること。中年を。惣領の
語くござりまする。京出て

「ゆへに孫の親乃ゆかりをうけひとりのおつり
とるさまよし世子も鉄のこゝろに血ひく一念
しけわりなき思ひまする。ゆゑこゝろざし惣領と
そぶそゝ事なきやうの人がに。さとさしく。柔
和うしく。鉄をもなく。五常の理ともまぶ。まつき
人は男も女も。徳あさふぞ。つきひますうともぐ。
惣領もうくさくゝ。一夜も他へゆかひて出ること
今く乳母のこゝぶしく奥へ寄りて〆念。智
実ておひちまちしくさきども乳母の教訓

なる程このまへは。却て愚なる識る人も聞あたらし。
実に申されたが。あらはる人全く徳の名をあらはしぬ
事じや。すべて此一条は。むかしの事でもなく。又
唐や天竺の事でもない。現在たゞ今の事
で。あなたも私が志ても悟人橋緒つも皆さ。又
その外の人にもとうけまするゆへしてもじや。
この事をおもうしやへるれへ。ぞうぞ。めぐみひとし。
この志を幸として。おくる極の中を省。秘
うそなし私ま。けんをみてさしぶそのあくまう

まず。先人の歌に
このみ人のりしの心はますかくしいみくいなとき
くもりもなきさ。拙明だんおくるしやまそう

下終